

加藤藤太郎

偉大と平凡

大阪駅から東海道線を西下し神崎川を渡ると左手に大きい製紙工場が見える。それが加藤さんの苦心の経営にかかる神崎製紙である。

加藤さんが王子製紙の副社長をパージになり遊んで居られた頃、旧王子の同志と相計り当時廃墟になっていた二万五千坪の神崎工場を再建されて、今日では七万五千坪の大工場になり、アート紙では圧倒的に日本一の工場に成長し、セミ・ケミカル方式によるパルプの近代生産に成功して総合製紙工場としても大きい躍進を遂げている。

しかし私は、この神崎製紙の業績の評価に力点を指向しようとは思わない。むしろ加藤さんの経営者としての、いやそれよりも加藤さんの人間としての人柄に敬意と礼讃を惜しまないものである。

この工場には労働者とか工員とかいうものがない。どの人でも社員であり、重役だからといって高禄を空しくはむとということがない。常勤重役より高い給与をうけている社員が多い。又殆

んど凡ての社員がこの会社の株式を大なり小なり所有している。凡ての社員が所有と経営に参加している。従つて、この会社には労働争議というものがない。

この方式は、あらかじめ新しい経営方式として加藤さんが意識的に目論まれたものかどうかは知らない。しかし加藤さんは本来、自分の幸福よりも他人の幸福に関心を失わない人である。自らは古びた家で簡素な生活を営まれているが、人の窮迫に対しては惜しみなく私財を投ずるといふ人である。ある人は加藤さんを評して「自虚性」を身につけた人だと言っている。

ある時、社員一同が浄財を出し合つて加藤さんの古いお家を改築してあげようとし、その旨をおそれるおそれる加藤さんにお伝えしたところ、加藤さんは「自分は君達の収入が一銭でも多くなるように心をくくっているのだから、その君達方から心配をしてもらつてというようなことは、お志は有難いが思いもよらぬことである」といつて断られ、未だに実現をみていない有様だといふ話である。

「この会社がともかくも順調に発展して、無一物から二十数億の税金を納めて国に御奉公でき、取引銀行からは終戦後手がけた事業でこんなにうまく行つたのではないといつて賞められるのも、偏に、これは社員一同がよく働いてくれたお蔭である。特に広瀬君や遠藤君をはじめ旧王子で多幸な将来を約束された有為の諸君が、無一物のこの会社にとびこんで苦勞をしてくれたお蔭です」

と加藤さんは口癖のように言っておられるが、自らの御苦心と高い信用については何にも言及されないのである。

私に加藤さんの人物評を書こうと思って、筆をとり上げてみるが、多くの人のように多彩な人生行路をおもちでないので、これといって取上げる秘話に乏しいのである。加藤さんにしてみれば、「自分としては只あたり前のことをこつこつやってきたし、又やっているにすぎないので、別にけなされることもなければ賞められる筋合でもあるまい」と言われるにちがいない。

しかし、その「あたり前のことをする」という平凡なことが何と尊いことか、現前の世相をみるにつけてもつくづく考えさせられるのである。(昭、三〇・八)